

## 跡の物語 The Story of the REMAINS

桑山 菊夏<sup>\*1</sup>  
Kikuna Kuwayama

小関 美南<sup>\*2</sup>  
Minami Koseki

諏訪 正樹<sup>\*3</sup>  
Masaki Suwa

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科<sup>\*1</sup>  
Graduate School of Media and Governance, Keio University

慶應義塾大学 SFC 研究所<sup>\*2</sup>  
Keio Research Institute at SFC

慶應義塾大学環境情報学部<sup>\*3</sup>  
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

Looking at a vacant lot and thereby imagining the building and someone's life that used to be there, and thinking of the owner of a used book from handwritten memos in the book etc. – Attending to "REMAINS", are able to associate them with many stories around it. When we notice some REMAINS, what elements do we recognize in the "REMAINS", and how do we make a story out of them? This project aims at promoting our meta-cognition through writing "The REMAIN's Story", and at enabling us to encounter new aspects of things in everyday life.

### 1. はじめに:「跡」に出会うこと

「跡」や「痕」について、思いを馳せたことがあるだろうか。わたしたちはこの言葉を、ときに何気なく、いつのまにか口にする。

紙につけた折り目、窓ガラスについた指紋、さら地、古本にある走り書き。すべては「跡」のようで、過去を思わせる。また、わたしたちは、さまざまな方法で残された「跡」を、利用したり、消したり、作り出したり、解釈したりする。

「跡」を見つめると、そこには“だれかが居た”、“なにかが動いた”物語が見えてくる。そのとき、私たちは、「跡」のどんな要素に気づき、その要素をどう解釈してその物語にたどり着いたのだろうか。私たちは、何を「跡」と感じているのだろうか。どのように「跡」が残され、私たちは「跡」にどんなふうに出会うのだろうか。

本研究は、日常における「跡」との出会いと「跡」の持っている物語性に惹かれて始まった。

「跡」との出会いの研究を行う上で、第一著者と第二著者の2名が様々な「跡」に着眼し、「跡」にまつわる具体的な体験を集め、世界の捉え方についての問いや気づきを生むことを目指し、研究手法を試行してきた。本稿は、その軌跡を記したものである。

### 2. 研究の動機と背景

#### 2.1 「予感」から語りを深める

世界の捉え方について気づきを得たいとして、筆者らがなぜ「跡」に着眼したのか。

一つは、「予感」である。「跡」について深めると、良い気づきを得られるのではないかと考えたためである。あまりに当てずっぽうではないと思われるかもしれないが、「予感」から始まっているということこそ、本研究の問いの本質が隠れている。

第一筆者が「跡」という概念について興味を持ち始めたのは、自らの散歩についての省察がきっかけである。この省察についでに小さなきっかけに過ぎないが、筆者らが興味を持つ「跡」がどのようなものかを具体的に提示するため、ここで少々語って

みる。

ある晴れた日、一人で散歩をしていた第一筆者(以下 K)は、小さな公園にたどり着く(図1)。少し古びた遊具と砂場、ベンチ、トイレがあるだけの小さな公園には、余白が少ない。K は、歩き回りながら観察する。砂場のそばに残される引きずった靴の跡、丸いトイレの周りに残った地面のくぼみから、遊具以外の場所で子供達の遊ぶ姿を想像することができる。

K は公園を離れ、また歩く。明るいピンク色のアパートの二階にふと目がいく。アパートのドアの前には、トランクが置かれている(図2)。なぜ、ここにトランクを置いたままなのだろうか。これから旅に出るのだろうか、どんな人なのだろうか。

しばらくまっすぐに歩くと、踏切に出会う。踏切を渡った瞬間、道の雰囲気が変わる(図3)。初めて来た土地なのに、なぜか懐かしい気持ちになる。友人と歩いた、別の場所での思い出がよぎる。あの日、あの時のあの場所と今歩くこの場所は、もしかしたら何かが似ているのかもしれない。



左上：図1 小さな公園

右上：図2 アパートとトランク

左下：図3 踏切の先の道

連絡先: 桑山菊夏, 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科, 神奈川県藤沢市遠藤 5322, kikuna@sfc.keio.ac.jp

別の日のことだ。また歩く。遠くを見つめると、少し先に見える家の屋根に、「つまみ」のような出っ張りが複数ついている。きっと、太陽光パネルが設置されていたのではないか。一度つけて外してしまったのか、設置するつもりで結局設置していないのかもしれない。ないようでそこにあるパネルの居場所は、なぜかむずむずと心をくすぐる。

K は思った。公園には、人の集まり方を示す「跡」がある。目についてしまう曖昧な「跡」は、誰かの生活を思わせる。その「誰か」の人となりと思わせる。そして、また別の場面では、自らの身体に残っている記憶という「跡」がある。

この省察は、おそらく K の体験した散歩のすべてを伝えてはくれない。K の印象に残ったことを、K の主観で切り取って記したものであり、現象についての「正確な」説明ではないからだ。

しかし、K 自身には、「跡」との出会いが重要であるのではないかという仮説と、「跡」に興味を惹かれる自分自身についての疑問がもたらされた。一つとして同じものはない「跡」について、もう二度と出会わない小さな何気ない出来事が気になり、「跡」という一つの言葉を用いて語るのだろうか。

このような疑問から、K は「跡」に対する興味が高まることとなった。また、この興味について第二著者に語り、彼女も類似した問いを持っているのではないかと感じた。その共感とは、「跡」を研究テーマとして選ぶと良いのではないかという予感に変わった。

「良い予感があるから」というのは、あまりに根拠の見えない研究動機に聞こえる。しかし、私たちの暮らし、世界、生き方には、まだまだ予想もつかない何かが隠れているはずだ。「臨床の知」[中村 1992]は、我々の世界を形作る言語のシステムについて紐解こうとすることの中に見いだすことができるのではないか。

普段は気にとめることがない「跡」に着眼することで、暮らしにころがっているものごとの思いがけない表情や生き様に出会うことができる。「跡」との出会いを物語る試みが、「経験すること」が私たちにもたらす変化と、その土台についての見直しに繋がることを強く期待する。

## 2.2 「跡」の持つ可能性

本研究の目的は、「跡」を定義することにあるのではない。「跡」がどのようにつくられているかを解きほぐすこと、そして「跡」を感じる自らの認知の働きについて見詰め直すということだ。

本研究の開始は「予感」と言えるが、テーマについて検討しなかったわけではないので、そのことについても触れておく。筆者らは、改めて問いを深め、自分たちがなぜ「跡」をテーマに選ぶのか論じる。

まず第一に、「跡」は様々な状況の積み重ねが顕在化したものである。世界に存在する「跡」の一つ一つは、さまざまな状況が重なったが故に生まれた、唯一無二のものである。したがって、「跡」を研究することによって、認知の状況依存性 (situated cognition) の様々な側面を掘り起こすことができるのではないかと思うのである。

例えば、コップについた口紅の「跡」。もし、ほんの少しだけ長く口をつけていたら。また、もし今朝気分が変わって、違う口紅を選んでいたら、異なる「跡」が今ここにあったかもしれない。

第二に、「跡」に気づくことをきっかけにして、過去・未来の誰かの行為に注目できるという点である。「跡」がつく前の状態から今までの間について、想像することができるのだ。

「跡」を感じる時、「跡」そのものの自体を見つつ、そこから「何かが居たのだな」と感じることができる。例えば、公園の砂場についた「足跡」。その形と道筋から、この場所で遊んでいた、そし

て遊ぶであろう子供たちのありさま、存在を想像することができる。「今、ここに、私が感じる、この跡」は、過去や未来など、「この場所、この時以外」との連続性の中にあるものとして考えることができる。

上にあげた2つの「跡」の性質は、もちろんある側面を見るための着眼点である。ないはずのところにある「異質なものを」感じる (例: 床の傷跡)、そのものから何かの気配を感じる (例: 残り香)、残したその人自身の証明としての価値を感じる (例: 人柄の現れる筆跡) など、さまざまな要素が「跡」の認知を導くのではないかとぼんやりとした仮説が筆者らの議論の中にあった。

しかし、本研究では、生活のなかで新たに具体的な体験の記述を重ね、仮説に基づかず、生活の感覚にできる限り正直に残した。これらの仮説を崩すことを意識した。議論で生まれた「跡」についての仮説を頭の中から完全に消すことはできないが、できる限りそのとき出会った場面をもとに「跡」を集めることをした。

このように述べると、あらかじめ考えの中にあった仮説から、無理矢理に何もかもを「跡」とみなすことができるのではないかという懸念が生まれるだろう。要するに「解釈次第ではないか？」という批判である。

しかし、本研究において目指すのは、暮らしや「跡」の可能性を広げる探求だ。つまり、積極的に解釈し、「跡」や生活を語るための語彙やその使い方を増やすことで、生活に転がっている様々なものごとの新たな側面や可能性をすくい上げることを目指している。

## 3. 活動概要

本研究における活動を、以下の3つに分けることができる。

### (1) 跡を集める

日常生活の中で「跡」にまつわる出来事を見つけ、自ら言葉で残す。必要であれば、図や写真なども用いる。その場で「これは「跡」だ！」と明確に意識できなくても、関連しそうなことは残しておく。

実施するのは二名 (第一著者、第二著者)、実施期間は約4ヶ月間 (2017 年 7～11 月) である。

### (2) 「跡」について話す

(1)を実施する二名で顔を合わせ、それぞれの生活で「跡」について考えたことを持ち寄る。集めた記述を見せつつ、語る。

約4ヶ月の間、K と M の二名 (以下、プロジェクトメンバー) は、それぞれが日常生活の中に「跡」を集める。それらを持ち寄るミーティングを行い、集めた「跡」や「跡」に関して考えを話すことで、気づいていなかった観点を得たり、行動を変えたりする。

ミーティングは、4ヶ月間で 7 回実施した。場所は、飲食店や大学の教室など、座って静かに話をできるところを選んだ。

K は、修士課程に所属する学生として過ごし、大学のキャンパス、一人で暮らす家、アルバイト先の学習塾などで過ごすことが多い。M は、会社員として働いている。K と M は、大学時代から約3年以上の付き合いではあるが、プロジェクトの活動期間は、「跡」について話すミーティングによって互いの近況を知ることが多かった。

環境や生活の仕方の異なるお互いの視点からヒントを得ながら、それぞれの「跡」集めに取り組んだ。

### (3) 「跡」についての言葉を生み出す

集めた記述は、何らかの意味で「跡」に関連する言葉である。したがって、それらの記述の共通性や構成要素を見出すことによって、「跡」についての言葉をさらに生み出すことを試みる。本

研究では、集めた記述からタグを作成し、さらにグルーピングする方法を用いた。

#### 4. 「跡」との出会いを記述する

まず、「跡」とどのように出会い、どのような出来事を経験したのか、記述することが「跡」を集めるために必要である。主観的な経験として、できる限り「豊かに」残すことが求められる。

これは、からだメタ認知 [諏訪・藤井 2015] の実践を繰り返し、「体感をことばにする」ことを習慣化することである。もちろん、意識することには制限があるが、観察できることを増やそうとし、じっくりとできるだけ時間をかけ、余さずそのままに経験をなぞろうとする。

以下は、第二著者(以下、M)の記述例の一つである。『詩に就いて』[谷川 2015]という本との記述である。

『詩に就いて』(谷川俊太郎)

ハードカバーの本に、しおりのひもの跡、ついていた。しおりで分けた2つのページに、うねったしおりの跡。これは、ハードカバーのかたさと、少しかたい紙の素材と、本と本に挟まれていた、本棚の中のひしめきや密度と、それから一彼が微動だにしかなかった時間の長さである。

そうか、そんなに長らくご無沙汰だったのか。視界にはいつも入っていた。枕元の小さな本棚にいたので、毎晩寝るときに、タイトルがちらっと。そこにいる、ということはずっと認識していた。だから、開くのがそんなに久しぶりだったなんて、なんだか少し反省してしまった。君のことはずっと好きだったのよ、そこにいるというだけで、タイトルや佇まいだけで、買った当時の心に帰るような。開いてなくとも、私を静かに鼓舞してくれています。彼の静かなかなしみが胸にきて、思わず愛の弁明。

カバーは少し傷んでいて、ところどころ破けている。帯も気に入っていつけたままだが、何かがこすれた跡がついている。紙の色がそこだけはげており、触ると少し毛羽立っていて、跡がついた瞬間の激しさを思う。周りの本を出し入れした時についたのだろうか？それとも、あなたを買ってすぐに、レジの人のブックカバーも断って、電車の中でぼんやりと真剣に読みふけていたから、外傷に気づかなかったのかもしれない。

あなたに会った藤沢の有隣堂で、私は研究がよくわからなくなっていた。ちょうど一年前だった。先生に相談する日の当日だったか前日だったか。研究になりそう、という予感を信じて進めていたのに、これが発表の際にどんな形になるのか、果たしてそれで研究といえるのか。今まで漠然と抱いていた不安が、おぼけになって立ち現れたのだ。助けがほしい。そういう時は、私の好きな人・尊敬する人の言葉に触れに行く。有隣堂の、詩のコーナーが私のエネルギーになることは、卒論の頃から知っている。まるで・・・まるで・・・なんだ？こういうのって、なんて表現すればいいんだろう？あそこに行けば、きっと何かが歩を進めてくれる、という存在・・・師匠かな。気持ちも考えもまとまっていない状態でたどたどしく話しても、“それはいい予感だよ”と認めてくださる。

そう、今日もまさに、この時と同じ状況で、これを手に取った。これが研究といえるのかもやもやぐにやぐに

やとずっと考えてきて、あ、ちょっと師匠のお言葉に触れよう、と思って、佐伯先生の『認知科学の方法』のまえがきと最初の九ページを読んだ。そしてもう一冊、何か今の私を認めてくれそうな、あるいは歩を進めてくれそうな、これを手に取った。

やはり、あなたはいつも一緒に行動する相棒ではないのだ。そこにずっといてくれるという事実日々安心し、本当に困ったとき、迷ったときだけ、開くもの。何かの切り札のような。

こうして考えてみると、あなたと私のこういう関係が、まさに跡に表出されている。

あなたの周りは激しく動いていて、私はその激しい中で悩んだり、もがいたりしているのだけれど、あなた自身・あなたの中身は変わらずそこにいて、しおりもわずかにも動かさずにずっとそこにいてくれて、そのままくっきり跡がつくほどどっしりと構えてくれている。

記述名:「ハードカバーの本に、葉の跡」

Mのこの記述では、ものとの関係性を改めて解釈し直し、ほかの出来事(別の本を手に取ったこと)への連想で思考を広げる。連想で「思い出」を引き出し、自らの感情も見つめ直しているとも言える。

記述をする際に「どこまで、いつまで観察するか」が問題になる。これは、そのときに関連すると感じたところまで行う。もちろん、自ら関連を見出し、記述できること以上に、人生の「経験」として繋がりがあろう。しかし、それらに気づく糸口を見つけるには、自分視点で見られる世界のありように気を配り、目の前にあるものについて、まるごとの私が何を感じているのか、じっくりと観察することが不可欠である。

#### 5. 「跡」についての言葉を生み出す

##### 5.1 相互作用をつくるタグ

約4ヶ月間、プロジェクトメンバー2名がそれぞれ「跡」を集め、合わせて114の記述を集めた。

そして、集めた「跡」を用いて、改めて「跡」に関する言葉を作り出すことを目指しタグづけを行った。記述同士に新たな言葉同士の関係を見いだすことで、「跡」について語るための新たな観点や、「跡」についてのキーワードをさらに生み出すことを試みるためである。

一般に、タグと呼ばれるものは複数の記述を分類するために付与するものであると考えられることが多い。そのため、タグに用いられる言葉の抽象度を揃えたり、網羅性があるかどうかについて検討されたりする。

しかし、本研究においては、まずは、記述に「ふだ」をつけるという簡素な考え方に留める。

体験についての語り・解釈に、さらに重ねて短い解釈(=タグ)を重ねてつける。その短い解釈は、その記述自体についての要点をかいつまんだものであったり、「解剖」したり「解説」したりするものこともある。もしくは、他の記述との関連性から、相対的に生まれることもある。あえて秩序づけず曖昧にし、さまざまな解釈の可能性を探る。

また、さまざまな言葉を付与することで、他の記述や他の記述についたタグ、自らの記憶などとさらに結びつき、解釈がうまれる。

タグを用いた分類の作成は、記述同士に見出される差異をもとにはっきりと切り分けることである。



本研究においてのタグの主な役割は、「ふだ」を作る作業の中でさらに新たな考えや着眼点を生むことである。また、タグと記述、タグとタグ、タグとプロジェクトメンバーの相互影響・作用を作り出すことである。

5.2 タグの作成とグルーピング

記述を改めて読み、描写された体験、そして記述自体について重要と思われる点を「要点タグ」として拾い上げる。  
例えば、4 章で挙げた「ハードカバーの本に、葉の跡」に記述した本人である M がつけた要点タグが、以下の9つである。

表1 「ハードカバーの本に、葉の跡」の要点タグ

|                        |
|------------------------|
| 時間の跡                   |
| 跡をつくった要素 密度            |
| 跡がついた瞬間                |
| 跡から想起される激しさ            |
| わたしとそのモノの関係性を物語る       |
| 跡を介してわたしとそのモノの関係性が変化する |
| 微動だにせずにそこに居続ける         |
| 跡をつくった要素 本棚のひしめき       |
| 過去の瞬間を想像する             |

このように、各記述について、記述者自身が要点タグを付与した。そして、要点タグ名どうしで似ているものを集め、タググループを作成した。  
114 の記述にそれぞれ要点タグを付与し、167 種類を作成した。167 種類の要点タグをグルーピングすると、タググループが 38 個作成できた(その一部を表 2 に掲載する)。167 種類のうちの 65 種類は、38 のタググループには属さず、単独のまま残った。

表2 タググループ名と含まれる要点タグ名 (一部抜粋)

| タググループ名       | 要点タグ名            |
|---------------|------------------|
| そのまま居続ける      | 変化しない跡           |
|               | 過去を閉じ込めている跡      |
| 救い            | 跡に救われる           |
|               | 跡が味方してくれる        |
| 継ぐ            | 語り継ぐ             |
|               | 受け継ぐ             |
| 正体が見えない・わからない | 軌跡がわからない         |
|               | どこについているのかわからない跡 |
|               | 見えない             |
|               | 跡に気づかない          |
|               | 跡に気づけない          |

表3 タググループ名一覧

|                     |               |
|---------------------|---------------|
| そのまま居続ける            | 跡のつき方         |
| 残らない                | 当たり前          |
| 正体が見えない・わからない       | 想像する          |
| 今まで気づかなかったものを顕在化させる | なかったことにする・しない |
| 跡に対する積極的な働きかけ       | 音             |
| 跡?                  | 時間とともにつくる跡    |
| わたしと跡               | 跡の要素に関する考察    |
| 思い出す                | 言霊            |
| 重ねる・重なる             | ちから           |

|            |            |
|------------|------------|
| 流れ         | 他者、だれかの跡   |
| 比べる        | 過去の重み      |
| 跡の痕跡       | 生命力を感じる    |
| 余韻         | 場所         |
| 「いつも」が変化する | たどる        |
| 継ぐ         | 残る         |
| 境界         | 安心する       |
| そこで何かが起こった | 限定・刹那      |
| 未来を感じる     | 染みる        |
| 救い         | 跡を残したいという欲 |

タググループを作成したことによって、タグ同士、そして記述同士の相互関係が明示され、共通点や差異を見いだすなど、新たな考えが生まれやすくなる。また、タググループ名も新たな着眼点としてはたらく。

6. おわりに: 今後の課題と期待

筆者らは、本研究を「跡の物語」と題して進め、何気ない日常の中のシーンを描写した「物語」の深さと豊かさにこだわりを持ち、言葉や視点を増やす試みを行ってきた。  
しかし、「物語」としての豊かさを求めるあまり、まとまりが良いとは言えない方向に向かってしまったことは否めない。思考は発散の方向に向かい、「跡とは?」というはっきりした答えを出すことはできなかった。濃く広がった「跡」についての物語を、どのように周りに提示するのか。また、どのように人々からの反応を得られるような仕組みを作るのか。これらが大きな課題だ。  
しかし、課題と同時に、広がった物語を集約しすぎずに伝えることが何を生むのか、期待も生まれた。以下、K の記述である。

傘の持ち手の傷。まだ2回しか使っていないのに、もう傷がついてしまっている。ピカピカの新品は、ほんの一瞬しか保たれない。跡が積み重なって、新しいが古いになるのはいつなのかなあ。この傘だけじゃない、いろんなものがどんなふうに「古い」になるのか興味が湧いてわくわくした。

記述名:「新しい傘」

1本の傘に傷がついた。その出来事を、「いろんなもの」に広げ、「古さと新しさの境目」に考えを巡らせる。このようなことを、わたしたちは度々行っていないだろうか。世界には、違っているが「似ている」ことがある。ひとつの出来事から、おおきな考えに可能性を広げることができる。  
筆者らが惹かれているのは実は「跡」ではなく、さらにおおきな何かかもしれない。「誰もが生きながら物語を作っている」[小川 2008]と捉えたと、何気ない日常の「普通」と思っていることに、自らの生きる物語を広げ、伝える手がかりを見つけることができるのではないかな。

参考文献

[中村 1992]中村雄二郎: 臨床の知とは何か, 岩波書店, 1992.  
[小川 2008]小川洋子: 二人のルート, 河合隼雄・小川洋子著『生きるとは、自分の物語をつくること』, 新潮社, 2008.  
[佐伯 2007]佐伯胖: 認知科学の方法, 東京大学出版会, 2007.  
[諏訪・藤井 2015] 諏訪正樹, 藤井晴行: 知のデザイン, 出版社, 2015.  
[谷川 2015] 谷川俊太郎: 詩に就いて, 思潮社, 2015.